

92/8/24

W
A
L
T
Z
……
重
な
っ
た
ら
、
ど
う
す
る
？

岸田理生

一千九百三十三年ドイツ……、一月三十日、ヒトラーは宰相として、挙国一致の内閣の組織を引き受けた。

一千八百八十九年オーストリア・イン河畔のプルナウに生まれたこの裝飾職人は、早くから政治の悪霊にとり憑かれ、一千九百十九年八月には銃前屋のドレクスラーがミュンヘンで指導していたドイツ国粹労働党に入り、戦争は終わっていない、ドイツの隆盛のためには闘争を続けなければならず、国粹社会主義は必ず階級間の同盟を実現する、という主張を繰り返すようになっていた。

街がある。

街には人がいる。

人々は歩いている。

街を歩いている。

孤独な独白を繰り返しながら歩いている。

男1

「ヴェルギリウスの「イーニド」には14万種類の痛みが登場する。俺のは何番目の痛みだろう。混乱するだけだから、もうドイツ国民でいたくない……。苦痛第一千三百八十七番」

女1

「逃避は高くつくけど、呼吸より必要な時もあるわ」

男2

「人生は災難と糞つたれだらけだ」

女2

「この世には、誰も絶対に無関係ではいられないことが2つあるわ。愛と失望よ。そのどちらも扇風機みたいにスイッチを切ったり、向きを変えたりして訳にはいかないわ」

男3

「故障した懐中時計を開けてみて、ごきぶりの死体を発見した男が叫んだ。なるほど動

かん訳だ。機関手が死んでいる」

女3 「なんでもないわ。ただ、霧のように頭の中に広がりだしただけ……」

女4 「頭痛がしてきたわ。二匹の猫が紐にじやれついているのを見ているような気分」

男1 「皮肉なら、もっと日が高くなってからにしてくれ。やりたいのか、やりたくないのか、今はそれが知りたいだけなんだ」

女1 「あの退屈なホルスタイン女。いい加減にしてよ、母さん」

男2 「現実というのは、忘却という切符を買おうと行列している人間たちの中に割込んでくる、太って無礼な男のようなものだ」

女2 「アメリカに行きたいのよ。なんのために、ですって？行かなければよかったと後悔するためによ、勿論」

男3 「あいつは葦笛のように細い声で笑った」

女3 「あの人は穏やかな水面を茜色に染めて湖沈んでいく太陽みたいに笑った」

女4 「見せの名前は「基本的書物」というのよ」

街を歩く人々は店に入って行く。

店は「基本的書物」という名の酒場である。

人々は椅子に座る。

酒を飲み始める。

相変らず私語は続いている。

女2 「私はあんなのなにもかもが気にいらないわ。そのまぬけ面も、ふざけた名前も、偽物の鼻も。覚えておくのね。あんたはただの肉の塊り。明日は別の肉に取って代られる肉の塊り」

男1 「娼婦のたわごとだ」

女3 「人はいつ大人になるか、知っている？」

男1 「いつだ？」

女3 「友達全員に見離されて遊んで貰えなくなった時よ」

男1 「娼婦のたわごとだ」

女4 「調教済みの猿一匹。あんたのことよ」

男1 「娼婦のたわごとだ」

男3 「ヘビー・ドリinkerは必ずヘビー・スモーカーです」

男1 「そうかね？」

男3 「そうです。それは大きな謎ではありません。人間には常に肉体を完全な安定状態に保とうとするバイオフィードバックの機能があるんです」

男1 「バイオなんだって？」

男3 「バイオフィードバック……つまり生体自己制御の機能があるんです」

女2 「馬鹿みたい」

男3 「それでですね、酒を飲むと血管が膨張します」

男1 「そうかね？」

男3 「そうです。それですね、血管が膨張すると肉体はそれに反発し、元の状態に戻ろうとする」

女3 「馬鹿みたい」

男3 「そこでメッセージが内分泌腺と脳の間を行き交い、自然に煙草が吸いたくなるという訳です」

男1 「そうかね？」

男3 「そうです。但し、味は関係ありません。求められているのはニコチンなんです」

男1 「そうかね？」

男3 「そうです。ニコチンには血管を収縮させる働きがありますからね」

女4

「馬鹿みたい」

男3

「ですからね、ヘビー・スモーカーは決まってヘビー・ドリンカーなんです」

男1

「酒で開いて煙草で閉じる、という訳だ」

男3

「酒で開いて煙草で閉じるんです。血管をね」

女2

「酒で開いて煙草で閉じるんですってさ」

女3

「血管をね」

女4

「かなり馬鹿みたい」

女2

「金で開いて男で閉じるのよ。体をね」

女3

「男で開いて金で閉じるのよ。女はね」

女4

「嘘で開いて本当で閉じるのよ。口をね」

女2

「本当で開いて嘘で閉じるのよ。女はね」

女3

「夢で開いて現実で閉じるのよ。人生をね」

女4

「現実で開いて夢で閉じるのよ。女はね」

人々は煙草を吸いながら酒を飲んでいる。

音楽はさわがしい。

不意に、女2が、

女2

「田舎に帰りたいわ」

呟く。

女3

「田舎にね」

女4

「帰りたいわ」

女2

「無数の薔薇のむせかえるような香りに包まれて、すばらしい春の朝の空気をおなかいっぱい吸う、そんな田舎」

女3

「ティーローズ、マスクローズ、パーペチュアルローズ、花壇に咲く薔薇、壁を伝う薔薇、垣根にからむ薔薇、赤紫、真紅、珊瑚色、黄色、煉瓦の壁に、滝のように垂れたり、逆に這い上がったりしている蔓薔薇、小道に沿って垣根を彩るフロリバンダ種の薔薇」

男3

「ティーローズひひひ、マスクローズひひひひひ、パーペチュアルローズひひひひひ」

男1

「花壇に咲く薔薇へへへ、壁を伝う薔薇へっへっへっ、垣根にからむ薔薇へえへえへえ」

男3

「赤紫、真紅、珊瑚色、黄色、ふふふふふ」

男1

「煉瓦の壁に滝のように垂れたりほっほっほっ、逆に這い上がったりしている蔓薔薇はっはっはっ」

男3

「小道に沿って垣根を彩るフロリバンダ種の薔薇ふおふおふお」

男1と男3は、嘲笑する。

女2、ゆっくりとナイフを取りだす。

女3

「やめなさいよ」

女2

「……なぜ？」

女3

「こんな猿たちを殺したって、世の中変らないわ」

女2

「……そうね」

女3

「記憶はいつだって騒がしいものよ。だから、一人の時にしか思いだしちゃいけないのよ」

女2

「そうね」

女3

「そうよ」

黙り込む人々。

すると、女1と男2が、反対方向から現われて来、テーブルの上の紙幣を同時に掴む。男が盗んだのか、女が盗んだのか、わからない。それから男と女は視線を交わし、笑み、腕を組むと去って行く。

男1 「見たか？」

男3 「見た」

女2 「見た？」

女3 「見たわ」

男1 「見たか？」

女4 「見たわ」

問いと答えが混じり合い、人々は頷き合う。

男と女は、小部屋に現われと話し始める。

一千九百三十三年二月一日、ドイツ全国民に＜国民的政府に対する関与＞を許すため、国会は解散され、ヒトラーは直ちに、行政から共和的機構を一掃するための仕事にとりかかった。＜民族と国家の＞ための一つの法律が、彼に、新聞と結社を弾圧する機能を与えた。

二月二十七日、国会放火事件。三月五日、新総選挙。三月二十三日、議会は四百四十票対九十四票で、宰相ヒトラーに全権を与えることを可決し、ヒトラーは、ドイツに於いて無制限の権力行使を許してくれる法的根拠を持つようになった。

女1 「もう、二カ月たったのよ」

男2 「もう、2カ月たった」

女1 「結果的に鳴かず飛ばずなのは、仕方ないと思うわ。問題はあなたがそういう状態に満足してる、ってことなのよ」

男2 「鳴かず飛ばず？どういう意味だ？」

女1 「言葉通りよ。あなたは鳴こうともしない。飛ばうともしない」

男2 「鳴かず飛ばずでも俺は俺だ」

女1 「そう。あなたは、あなたよ。でも、あなたのあなたは、日に日に前のあなたじゃなくなりかけている。……飲み過ぎよ」

男2 「飲み過ぎ？冗談じゃない。以前の半分だ。それでダウンだ」

女1 「量が半分に減ったら、時間は二倍に増える」

男2

「二倍に増えたのはセックスの量だ。間違わんでくれ」

女1

「またはじまった。私たち、手紙で話し合った方がよさそうね」

男2

「話で話し合おう。俺たちはいつも話で話し合ってきた」

女1

「いいわ、話を続けましょう。私、もう愛想が尽きたの。あなたに愛想が尽きたの。本当よ。あなたは世の中のことを何も知らない。自分の生き方に無頓着すぎる。毎日毎日、同じことの繰り返しばかり。無為、無気力、無味乾燥、もう沢山。うんざりよ」

男2

「俺が世の中のことを何も知らないだって？とんでもない。俺は何でも知っている例えば外交問題について聞いてみるよ」

女1

「外交問題ってなによ？」

男2

「外で交われば問題になる」

女1

「面白いわね……。いつか競馬の話をしてくれたことがあったでしょ」

男2

「それがどうした？」

女1

「馬にはそれぞれ得意な距離がある、って。人間だって同じよ、多分ね。あなたは短距離向きの馬もしくは人間なのよ。長距離は走れない。あなたに未来はない」

男2

「君が外泊するようになった理由がそれなのか？」

女1

「お金を溜めているのよ。私はもうすぐこの街を出る。あなたと別れてね」

男2

「二カ月も一緒にいたのに。俺は君に人生最良の二カ月を与えた」

女1

「あなたがくれたのは、哀しみと苛立ちと逃避願望だけよ」

男2

「いまさらどこへ行って何をしようって言うんだ？君は自分で思っている程、若くない、美人でもない、性格もよくない。いまさら人生のやり直しはきかないんだ」

女1

「あなたは過去、今は今日、私は明日のことを考えている」

男2

「君は俺を誰かの代理に仕立てようとしているんだ」

女1

「誰も誰かにはなれっこないわ。せいぜい自分になるだけよ。良くも悪くもね」

男2

「考え直せよ」

女1 「あなたは一度も変わろうとしなかった。あなたは結局あなたでしかなかった」

男2 「何も言うことはないのか？それ以外に、それ以上に」

女1 「何も言うことはないわ。それ以外に、それ以上に。言ってもはじまらない。誰も他人を変えられない」

男2 「俺は俺を変えられる」

女1 「七月の雪よ。誰が信じられると思う？」

男2 「俺が」

女1 「時間だわ」

男2 「時間？」

女1 「ええ」

男2 「何の時間だ？」

女1 「仕事に行く時間よ」

男2 「仕事？」

女1 「ええ」

男2 「パートタイムの娼婦が仕事か？」

女1 「ええ。フルタイムのろくでなしは仕事じゃないけれどね」

女1は小部屋を出て行く。

ヒトラーは憲法を一挙に変えることなく、漸次く基本法を改造して、く統一的、権力的、民衆的な国家を建設しはじめた。政府は、行政、立法の両権を欲しいままにし、これに対して国会は特別の場合にのみ召集され、ただ政府の政策に拍手を送るにとどまった。そのかわり、人民投票が採用された。第三帝国は権威の原理く総統位……フューラーllシユタント>の上に建てられたが、ヒトラー総統と彼に権威を与える国民との間には、一種のく委任>が存在し、これには報告の義務が伴う訳である。一千九百三十三年四月七日、中央権力によって任命される知事の新制度は、地方の自治権を排除し、各地方の主権は帝国政府に移された。

女1が小部屋を出ていったあと、男2は一人言を呟きながら街に彷徨い出る。

男2

「人類最大の発明はなにか?と聞かれた男が答えた。そりゃあ魔法瓶だ、と。何故?ともう一人の男が訊いた。すると男は言った。冬、外が華氏マイナス十度位の時に、熱い……そう、熱いスープを魔法瓶に入れて、スケートに行つたとする。それで、だ。それで、二時間経つて、だ。魔法瓶を開けると、凍える寒さにも関わらず、魔法瓶の中にはあつたつあつのスープが入っている。で、だ。で、真夏の糞熱い時に、魔法瓶に冷たいコーヒーを入れて、芝生を刈る。それで、だ。それで二時間経つてから、魔法瓶を開けると、中には、つめたーいコーヒーが入っている、つてわけだ。一体、魔法瓶の奴、どうやって判断するんだ?魔法瓶の外が熱いか、寒いか、てことをさ」

男2は、く基本的書物>と言う名の店に着く。と、男1が男2に訊く。

男1 「どういう例えだ？わからん」

男2 「つまり人類最大の発明はく愛だってことさ。あんまり凄い発明なんで、作って命を吹込んだのは人間なんだが、その内に、発明されたもの自体が力をつけて俺たちの手を離れ、今じゃ勝手にやっっている、って訳だ。魔法瓶にはわかっているんだよ。魔法瓶の外が熱いか、寒いか……。どうやって、わかるんだ？とは訊かないでくれよ。知らないんだから」

不意に笑いだす男3。

男3 「魔法瓶万才、ドイツ帝国万才」

男1は、男3を無視して、男2に話しかける。

男1 「俺は見立てをする」

男2 「見立て？」

男1 「ああ」

男2 「そいつは食べ物なのか？それとも新しい飲み物なのか？」

男3 「新しい飲み物？（笑う）」

男1、それを無視して、

男1 「それは食べ物でも、新しい飲み物でもない。そいつは思想だ」

男3 「思想（笑う）」

男1、それを無視して、

男1 「見立て、というのは、だ」

男2 「見立て、というのとは？」

男1 「初対面の人間を、一瞬のうちに鋭く見て取り、値踏みをし、自分の経験に照し合わせて品定めをする、ということだ」

男2 「人を憎む理由を無理矢理探している、ってことだな」

男1 「お角違いだ。俺がある男に対して初対面で下した判断は、気まぐれでもなんでもない。あえて言えば、年季の賜物ってことだ」

男3 「年季の賜物（笑う）」

男2、それを無視して、

男2 「勝手に話してくれ。酒はまだある。俺は酒のある間は帰らんことにしている。例えば、

相手が誇大妄想狂であろうと」

男3 「誇大妄想狂（笑う）」

男1、それを無視して、

男1 「こう仮定しよう」

男2 「どうぞ」

男1 「俺が、深夜に、一人で、暗い路地を歩いていたら、とする。突然、物音が聞こえ、誰かがゴミ箱の陰から飛びだしてくる。手にはぶつといタイヤ・チェーンをぶらさげている。

身長は二メートルあり、大きな傷痕が左のこめかみから右の耳にかけて走っている。おまけにバツファローのように筋肉が盛り上がっている。ここまでは、いいか？」

男2 「身長は二メートルで、手にはぶつといタイヤ・チェーンをぶらさげていて、大きな傷痕が左のこめかみから右の耳まで走っていて、おまけにバツファローみたいに筋肉が盛り上がっているんだ」

男1 「ああ。そいつは実の所、善良きわまりない肉屋の親父かもしれないし、ハイデルベルグ大学の哲学科の教授かもしれん。それは誰にもわからんことだ。だが、実際には誰だつて、ヤバイと思う筈だ。真夜中なんだからな、暗い路地なんだからな、一人なんだからな」

男2 「ああ」

男1 「そこで俺は、そいつが善良きわまりない肉屋の親父か、ハイデルベルグ大学の哲学科の教授かを訪ねる前に、棒つきれかなんかを見つけて、やられる前にやっちまう。お前だつて、そうだろう。そいつは二メートルで、タイヤ・チェーンで、筋肉なんだからな」

男2 「俺は、腕つぶしにまるで自信がない」

男1 「だから？」

男2 「逃げる。すたこらさつき、だ」

男1 「同じことだ。逃げるのも、戦うのも。どちらも身を守ることなんだから」

男3 「逃げる（笑う）」

男1、それを無視して、

男1 「で、だ」

男2 「で？」

男1 「で、つまりはそれが見立てって奴だ。おおよその見当で判断をくだす。当たっている時もあるし、間違っている時もある。だが、少なくともそれで生き延びることはできる。」

確かな手がかりをいつまでも待つ必要はない。あとで何かわかったら、その時点で、新しい判断を下せばいい。それだけのことだ」

男2 「あなたは差別主義者だ」

男3 「差別主義者（笑う）」

男1、それを無視して、

男1 「そう、それが見立てだ。あなたは今、俺に対して見立てをした最初にしては上出来だ」

男2 「それは差別というもので、あなたは差別主義者だ」

男1 「それは生きる知恵というもので、あなたは脳天気だ。これで、私もあなたの見立てをした。あなたはアホンダラだ」

男3 「アホンダラ（笑う）」

男1、それを無視して、

男1 「あなたは実際には考え深い人間なのかもしれないが、あなたをアホンダラと見立てた方が私の人生はより実り多いものになる。では、また」

男1は、く基本的書物」という名の店を出る。

一千九百三十三年六月二十二日、社会民主党は解散させられた。七月五日、中央党は解散させられた。鉄兜団はヒトラーの義勇軍の前に、たちまち潰え、六月二十七日、野心家のフーゲンベルグは罷免された。

男2の歩く街には、女たちが現われてくる。

女2 「その話をしたいわ。便秘の禿鷹の真似はもう嫌」

女3 「眼差しのように素早く、たわごとのように虚ろな、甘い時間を待っているのよ」

女4 「誰もが気違いになっていくし、いなくなった犬は見つからないし」

女たちは、言葉を繰り返しながら、歩き続ける。

女2 「どんな雲も裏側は銀色だなんて言ったって、そんなこと誰が喜ぶのかしら？裏が銀色だからって、そこを通して、お日様を覗けるわけじゃなし」

女3 「朝っぱらからふざけないでよ。朝の冗談と朝のセックスが、私、いちばん嫌いなもの」

女4 「中国の諺を知っている？救われた命は、救った人間のものなのよ。救われるのも、考えものね」

女たちの言葉の中に紛れ込む、男1の言葉。

男1 「性欲でも権力欲でも、時に人はまったく同じ罠に落ちて、ひたむきになってしまおう。

男1についてゆく。

1934年6月30日、ヒトラーはミュンヘンでレーム、フォン・シュライヘル、フォン・パーペン、フォン・カール、グレゴール・シュトラッサーなどを処刑した。彼等はヒトラーの独裁に反対したからである、勿論。

小部屋では女1が、男2に、

女1 「驢馬は発情するの？」

男2 「驢馬は発情しない。驢馬は友情するんだ」

女1 「くだらない」

男2 「お前がいない間、俺は驢馬だったよ」

女1 「あなたが何をしようと、私は気にしてないわ。元々、あなたの節操なんて、期待してないんだから。あなたの節操なんて、三日月みたいなもんよ」

男2 「三日月？」

女1 「欠けてる、って訳」

男2 「なるほど」

女1 「あんたはこの街にいる娘の半分と寝ていて、残りの半分とは、これから寝ようとしてる。そうじゃない？動くものなら、蛇にだって飛びかかる人よ、あんたは。更生不能のろくでなし」

男2 「そんなことを言うために、わざわざ帰ってきたのか？」

女1 「そんなことを言うために、わざわざ帰ってきたのよ」

男2 「俺はとりとめもなく、ここにいたよ」

女1 「私は意志的に街を歩いてたわ。街には立派な人たちがいたわ」

男2 「立派……か」

女1 「立派……よ」

男2 「立派と比較しないでくれ。比較されたら、俺はまるで馬鹿に見える」

女1 「関係ない。あんたはいつだって馬鹿に見える」

男2と女1が黙り込むと、く基本的書物>という名の店では、街の人々が話しはじめる。

男1は眼鏡をかけて、役人風となっている。

男1 「盗んだんだね？」

女2 「盗んだのよ」

女3 「盗んだんだわ」

女4 「盗んだわ」

女たちは、同じ言葉を繰り返し、男3は痙攣的に笑う。

男1 「見たのかね？」

女2 「見たわ」

女3 「見たわよ」

女4 「ええ、見たわ」

女たちは、同じ言葉を繰り返し、男3は痙攣的に笑う。

男1 「何を盗んだんだね？」

女2 「お金よ」

女3 「お金だわ」

女4 「お金」

女たちは同じ言葉を繰り返し、男3は痙攣的に笑う。

男1 「つまり、あんたたちは、あの二人が金を盗むのを見たと言うんだね」

女たち 「ええ」

男1 「なるほど……。だが、私の所にはもう少し違った報告がきているんだがね、勿論、あの二人に関してだが」

女たちは黙り込み、男3はけたたましく笑う。

男1 「つまりだ、あの二人は金ではなく、もう少し違うものを盗んだというんだがね」

女たち 「……」

男1 「金ではない、くものくだよ」

女たちは黙り続け、男3は怯えて笑う。

男1 「つまりだ、あの二人はく基本的書物」という名の酒場で、一マルクを盗んだのではなく……」

女たち 「あの二人は、く基本的書物」という名の酒場で、一マルクを盗んだのではなく……？」

男1 「あの二人は……」

女たち 「あの二人は……？」

男1 「機密を盗んだと言うんだがね」

女2 「機密……」

女3 「機密ですって？」

女4 「機密よ……」

女2 「秘密じゃなくて」

女たち 「機密」

女3 「過密じゃなくて」

女たち 「機密」

女4 「蜂蜜でもなくて」

女たち 「機密」

女たちく機密>の意味を、わかっていない。

不意に男3が、辞書を読むような口調で、

男3 「機密……政治・軍事上の最も大切な秘密の事柄。機密費……機密の用途に当てる費用。

機密文書……機密の事柄を記した書類」

男1 「それだ。まさにそれだ」

女たち 「それよ。まさにそれよ」

男1 「それだよ。まさにそれだよ」

女たち 「それだわ。まさにそれだわ」

男1 「それさ。まさにそれさ」

女たち 「それなの。まさにそれなの」

男3、引き攣って笑う。

小部屋では、男2と女1が、

男2 「仕方ない。忠実な番犬を、使い古した靴みたいに捨てるんだな」

女1 「忠実な番犬？」

男2 「忠実な番犬だ」

女1 「誰が？」

男2 「俺が」

女1 「体を鍛えることでも考えたら？もうすぐあんたは四十の大台に乗る。そうしたら、どうなるか？」

男2 「どうなる？」

女1 「まず、ベッドから出られなくなる」

男2 「何故？」

女1 「何故か、起きても面白いことが何もない。だから、いつまでもベッドから出られない。それでも我慢して起きると」

男2 「どうなる？」

女1 「体の節々が痛む。飲むのは紅茶。蜂蜜とレモン入りの。そうして私が裸で部屋を歩いても、何も感じなくなる。何の反応も示さなくなる。一回やったら、一週間はできなくなる。歩くかわりにバスに乗る。雑誌のセックス欄のく私は変態的な女の子です。独身のやさしいオジサマを求めています。お手紙下さい。必ずお返事書きます」とってという広告を見て、手紙を書こうかどうしようかと考えはじめる。いいのよ、あなた。私は嫉妬なんてしない。だって、あなたは、もうおしまいなんだもの」

男2は、言われたことに傷つき、女1は言ったことに傷ついて、黙り込む。
く基本的書物」という名の店では、男1が女たちに訊いている。

男1 「(女2に) 確か、あんたは肉屋で……」

女3 「肉屋ですって」

女4 「肉屋ですってよ」

男1 「肉屋で、フランクフルトソーセージを」

女3 「フランクフルトソーセージですって」

女4 「フランクフルトソーセージですってよ」

男1 「フランクフルトソーセージを盗んだりはしなかったね」

女2 「……しなかったわ、ええ、しなかったわ、絶対にしなかった」

男1 「しなかったと思っただよ。あんたは、あの二人とは違うんだからね」

女2 「私は、あの二人とは違うわ。それは当たり前のことだわ。私は市民ですもの。国民ですもの」

男1 「そうだと思っただよ。私が市民で国民であるように、あんたも市民で国民だとね」

男3 「市民万才、国民万才」

男1 「(女3に) 確か、あんたは薬屋で」

女4 「薬屋ですって」

女2 「薬屋ですってよ」

男1 「薬屋で、コンドームを」

女4 「コンドームですって」

女2 「コンドームですってよ」

男1 「……しなかったわ、ええ、しなかったわ、絶対にしなかった」

女3 「しなかったと思っただよ。あんたは、あの二人とは違うんだからね」

女3 「私は、あの二人とは違うわ。それは当たり前のことだわ。私は市民ですもの。国民で

すもの」

男1 「そうだと思ったよ。私が市民で国民であるように、あんたも市民で国民だとね」

男3 「市民万才、国民万才」

男1 (女4に) 「確か、あんたは金物屋で」

女2 「金物屋ですって」

女3 「金物屋ですってよ」

男1 「金物屋で、ナイフを」

女2 「ナイフですって」

女3 「ナイフですってよ」

男1 「ナイフを盗んだりはしなかったね」

女4 「……しなかったわ、ええ、しなかったわ、絶対にしなかった」

男1 「しなかったと思ったよ。あんたは、あの二人とは違うんだからね」

女4 「私は、あの二人とは違うわ。それは当たり前のことだわ。私は市民ですもの。国民ですもの」

男1 「そうだと思ったよ。私が市民で国民であるように、あんたも市民で国民だとね」

男3 「市民万才、国民万才」

<基本的書物>という名の店に沈黙が訪れる。

小部屋では、男2と女1が、

男2 「いいかげんにしろ」

女1 「いいかげんにするわ。私が小さなオツパイで汗水たらして働いている時に、あんたは

大きなオツパイと汗水たらして遊んでいるけどね」

男2 「よせよ。泣き言を言うな。お前は、普通サイズの、かわいい、きれいなオツパイを、

不特定多数の男たちに見せびらかして、金を稼いでいる。俺が大きいオツパイに夢中になつてどこがいけない。オツパイごときでごたつくな」
「なんのために、私が、普通サイズの、かわいい、きれいなオツパイを、不特定多数の男たちに見せびらかしていると思うの？あんなのためじゃないとしたら？」
「金のためだ」

男2

女1

女1は、言われたことに傷つき、男2は言ったことに傷ついて黙り込む。
＜基本的書物＞という名の店では、男1が女たちに訊いている。

男1

「盗んだんだね？」

女2

「盗んだのよ」

女3

「盗んだんだわ」

女4

「盗んだわ」

女たちは同じ言葉を繰り返し、男3は痙攣的に笑う。

男1

「見たのかね？」

女2

「見たわ」

女3

「見たわよ」

女4

「ええ、見たわ」

女たちは同じ言葉を繰り返し、男3は痙攣的に笑う。

男1

「何を盗んだんだね、あの二人は」

女2 「あの二人は盗んだのよ」

女3 「あの二人は盗んだんだわ」

女4 「あの二人は盗んだわ」

男1 「何を盗んだんだね？あの二人は」

女2 「機密を」

女3 「盗んだのよ」

女4 「あの二人は」

男1 「あの二人は機密を盗んだんだね。＜基本的書物＞という名の酒場で一マルクを盗んだんじゃなくて」

女2 「機密を」

女3 「盗んだのよ」

女4 「あの二人は」

男1 「あの二人は機密を盗んだんだね、肉屋でフラン克福ルトソーセージを盗んだでもなく、薬屋でコンドームを盗んだでもなく、金物屋でナイフを盗んだでもなく」

女2 「機密を」

女3 「盗んだのよ」

女4 「あの二人は」

女たちは黙り、男1は黙り、男3は黙る。

小部屋では、男2と女1が、

女1 「憎たらしい」

男2 「ゆうべは、かわいらしいと言った」

女1 「ゆうべは、かわうらしかった。今は憎たらしい。いまわしい」

男2 「誰からも愛されるのはアホだけだ」

女1 「だれからも愛されないのは、なんて言うの?」

男2 「それもアホだ。世の中には、誰からも愛されるアホと、誰からも愛されないアホがいる。いや、その二種類しかいないんだ」

女1 「私は、誰からも愛されるアホで、あんたは誰からも愛されないアホって訳ね」

男2 「お前は、パートタイムの娼婦だ」

女1 「あんたは、フルタイムのろくでなしよ」

男2 「時間だ」

女1 「時間だわ」

男2 「出かけよう」

女1 「出かけましょう。足取り軽く、財布も軽く、そして脳天ほがらかに」

女1が言った瞬間、空間は断ち切られたように闇になる。
その中に流れ込んでくるドイツの童謡。

一千九百三十四年七月三日、ヒトラーはフンデンブルグから祝賀を受け、これより、国防軍を自己の支柱とみなすようになった。一千九百三十四年八月二日、ヒトラーは大統領と宰相の二つの機能を手に入れ、指揮権の全面的統一が実現した。それ以来、長い間の渡って、ヒトラーに体する抵抗は禁じられた。

溶明すると、＜空間＞には白衣の人々がいる。

彼等は、奇妙に歪んだ歩行で歩きながら話している。

女2 「私は脳の中にある、酵素の量を調べています。それは知能の比較に関する理論を実証するためです」

女3 「知能に関する理論とは、ある＜種＞に属する動物が、何故、多の＜種＞の動物よりも頭がいいのか、また、ある人間が、何故、多の人間より賢いのか、ということについての理論です」

女4 「私の理論は、知能が二つのものに依存することを前提としています」

男3 「ひとつは、ニューロンとニューロンの接触の数、その軸索と樹状突起の数です」

女2 「もうひとつは、シナプスにおける情報伝達のスピードと頻度です」

女3 「つまり、ある人間の脳の樹状突起の数が、普通の人間の二倍あれば、その人間は普通の人間の二倍、頭がいいのです」

女4 「ある人間が、他の人間に比べて、一秒あたり、二倍のシナプス伝達ができれば、その人間は、他の人間に比べて、二倍賢いのです」

男3 「単純そのものです」

女1と男2が現われる。すると白衣の人々は彼等を観察する。

女2 「老化と死は、肉体の組織に組み込まれていて、あらゆる生物がいつかは年をとり、死

んでゆくのです」

女1 「当たり前のことだわ」

女3 「偶然ではなく、そう定められているのです」

男2 「それで？」

女4 「自然は私たちが年をとり、死ぬことを望んでいるのです」

女1 「当たり前のことだわ」

男3 「老化は遺伝学的に決定されているのです」

男2 「それで？」

女2 「私たちの仮設によれば」

女3 「老化は、細胞のエネルギーの代謝をつかさどる遺伝子に」

女4 「既にプログラミングされているのです」

男2 「それで？」

男3 「だから、細胞のエネルギーの代謝を司どる遺伝子を」

女2 「操作することによって」

女3 「細胞の寿命を延すことが」

女4 「できるのです」

女1 「だから？」

男3 「私たちは」

女2 「これらの遺伝子を」

女3 「つきとめ、分析し、理解し、その機能を抑制し」

女4 「老化の過程を」
男3 「無限に遅らせることを」
女2 「試みたいのです」
女1 「どうぞ」
男2 「やっってください」
女1 「気のすむまで、やるといいわ」
男2 「但し、俺等は無関係ない」

男2と女1、顔を見合せて笑う。
すると、それまで黙っていた男1が、不意に口を開く。

男1 「人間の純粋なDNAを見たくはありませんか？」
女1 「人間の？」
男2 「純粋な？」
女1 「D？」
男2 「N？」
女1・男2 「A？」
男1 「人間の純粋なDNAですよ」
女1 「人間の……」
男2 「純粋な……」
女1 「D……」
男2 「N……」
女1・男2 「A……」

女1と男2、嘲笑する。
男1、それに構わず、

男1

「エタノール溶液の中で、それは黄色味を帯びた透明な幕を作りだし、ビーカーを振ると、湖の底の泥を掻き回したために、湖の水が光を受けてきらきら輝くように、光を反射してかすかにきらめく。デオキシリボ核酸……DNA……。それは奇跡。自己複製できる分子……。生命そのもの。その科学の暗号には、一人の人間を作りだすのに必要な情報がすべて含まれている」

うっとりと言いつ切る。

女1

「私が見たいのは……」

女2

「えっ？」

女1

「午後も遅くなって……」

女3

「えっ？」

女1

「薄い黄色の陽ざしが……」

女4

「えっ？」

女1

「斜の筋になって、窓から差し込み……」

女2

「えっ？」

女1

「意味もなく混乱して漂っている空気中の」

女3

「えっ？」

女1

「塵を照しだす光景だわ」

女4

「えっ？」

女2、女3、女4、顔を見合わせる。

男2

「そう、俺が見たいのは、午後も遅くなって、淡い黄色の陽ざしが、斜の筋になって、窓から差し込み、意味もなく混乱して漂っている空気中の塵を照しだす光景だよ」

女2

「意味もなく混乱して？」

女1

「意味もなく混乱して漂っている空気中の塵よ」

女3

「私たちはさんさん苦労して、すぐれた脳を作りだそうとしてきたわ」

女4

「動物に、神経伝達物質を食べさせ、賢くしようとしたわ」

女2

「妊娠した鼠を覚えている？」

女3

「妊娠している間、ずっとドーパミンを与えて」

女4

「胎児の脳を発達させようとしたわ、覚えている？」

女1

「だけど、鼠は死んだんでしょ？可愛そうな、ね・ず・み……」

女2

「本当の実験はこれまで不可能だったわ」

女3

「遺伝子を組み換え、胎児に自分で神経伝達物質を作るようにさせる……」

女4

「それも子宮にある時に」

女2

「それこそが」

女3

「私たちの」

女4

「実験」

女2

「プラスミド・チルドレン」

女3

「私たちの赤ちゃん」

男2

「なんだって？」

女4

「プラスミド・チルドレン」

女2

「私たちの赤ちゃん」

女3

「プラスミドDNAで、できた赤ちゃん」

女4

「染色体の外のDNA……で、できた赤ちゃん」

女2

「細胞核の中に組み込まれているのではなくて」

女3

「細胞質の中を自由に動くDNAを持った……私たちの赤ちゃん」

女4

「プラスミド・チルドレン」

女2

「そのために必要なのよ」

女3

「どうしても必要なのよ」

女4

「あなた方が必要なのよ」

女1と男2、立竦む。そのまわりで白衣の人々は、白衣を脱いでゆく。

ある者は<主婦>となり、ある者は<娘>となり、ある者は<母>となり、ある者は<労働者>となり、街は形成される。

その中で、男1は<役人>となる。

一千九百三十三年四月一日以降、ユダヤ商人に対して、＜防衛ポイコット＞が組織された。一千九百三十三年四月七日の官吏任用法はユダヤ人とアリアン人との間に絶対的な差別を設け、アリアン人のみが帝国の市民たる資格を与えられることとなった。九月十五日の法律はユダヤ人から、一切の政治上の権利を剥奪した。

街の人々は、女1と男2をよけながら、歩きだす。

女2、女3、女4は声を合わせ、

女2・3・4 「おはよう、おはよう、おはよう」

女2 「街をきれいにしましょう」

女2・3・4 「おはよう、おはよう、おはよう」

女3 「体をきれいにしましょう」

女2・3・4 「おはよう、おはよう、おはよう」

女4 「血をきれいにしましょう」

女2 「おはよう」

女2・3・4 「街をきれいにしましょう」

女3 「おはよう」

女2・3・4 「体をきれいにしましょう」

女4 「おはよう」

女2・3・4 「血をきれいにしましょう」

女2 「私たちの街をきれいにしましょう」

女3 「私たちの体をきれいにしましょう」
女4 「私たちの血をきれいにしましょう」
女2 「おはよう」
女3 「おはよう」
女4 「おはよう」
女2 「私たちの街はきれいです」
女3 「私たちの体はきれいです」
女4 「私たちの血はきれいです」

街の人々は笑顔で歩く。取り残されている女1と男2。

女2 「おはよう」
女1 「おはよう」
女3 「きれいですか？」
女1 「……」
女2 「体はきれいですか？」
女3 「血はきれいですか？」
女1 「……」
女2 「体はきれいですか？」
女3 「血はきれいですか？」
女1 「おなが……」
女2 「えっ？」
女1 「おなが、すいているわ」
女3 「えっ？」

女1 「おなが、すいているのよ」

女2 「なぜ？」

女1 「誰も食べ物を買ってくれないから」

女3 「なぜ？」

女1 「知らないわ……、いつの間にか、そうになっていたのよ。気がついたら、そうになっていたのよ」

女2 「誰も」

女3 「食べ物を」

女4 「売ってくれないのね」

女2 「気がついたら、」

女3 「そうになっていたのね」

沈黙があり、やがて、

女2 「汚い……」

女3 「汚いのよ」

女4 「汚いんだわ」

女2・3・4、女1と男2をさける。

女2 「汚い……怖ろしい」

女3 「汚い……醜い」

女4 「汚い……近寄るべからず」

女2 「細菌」

女3 「黴菌」

女4 「ペスト菌」

女2 「うつる」

女3 「うつるわ」

女4 「うつるわよ」

女2 「街が汚れる」

女3 「体が汚れる」

女4 「血が汚れる」

女2 「来ないで、細菌」

女3 「近寄らないで、黴菌」

女4 「あっちへ行って、ペスト菌」

女2 「私たちの街を汚さないで」

女3 「私たちの体を汚さないで」

女4 「私たちの血を汚さないで」

女1 「やめて」

女1、叫ぶと男2と共に小部屋に入る。

そのあとを追い、小部屋を取り巻く人々。聴き耳を立てる。

女1 「おなかがすいたわ」

男2 「ああ、腹が減った」

女1 「猫でもいいから、食べたいわ」

硬直する街の人々。

男1が、街の人々に訊く。

男1 「聞いたかね？」

女2 「聞いたわ」

男1 「あの売国奴たちの言ったことを聞いたかね？」

女3 「聞いたわ」

男1 「あの売国奴たちが、猫を食べたいと言ったのを聞いたかね」
女4 「聞いたわ」

街の人々はあとずさりして、〈基本的書物〉という名の店にゆく。

女1 「おなかがすいたわ」

男2 「ああ、腹が減った」

女1 「猫でもいいから、食べたいわ」

女1と男2は繰り返している。

女2 「猫を食べるんですって？」

女3 「ええ、猫を食べるんですって」

女4 「猫を食べるのよ」

男1 「そう、確かにあの売国奴たちは猫を食べると言った」

街の人々は、繰り返しながら、〈基本的書物〉という名の店に入る。

男1 「考え事をするのに適した動物がいるように、罵倒に適した動物もいる」

男3 「猫だ！」

男1 「そう、猫だ。牝牛を相手に嫌がらせの儀式をする訳にはいかない。やっぱり猫が必要だ」

女2 「ええ、牝牛を相手に嫌がらせの儀式をする訳にはいかないわ」

女3 「そんなことは昔から、決まっているわ」

女4 「やっぱり、猫が必要よ」

女2・3・4 「カツエンムジーク、嫌がらせ。猫の音楽、嫌がらせ」

囃したてる。

男1 「そう、猫を苛めるのは健全な娯楽だ」

女2・3・4 「カツエンムジーク、嫌がらせ。猫の音楽、嫌がらせ」

男1 「四旬節の第一日曜日には、猫を竿に縛りつけ、篝火の上であぶる」

男3 「カツエンムジーク、嫌がらせ。猫の音楽、嫌がらせ」

男1 「聖体の大祝日には、猫を空中高く放り投げ、地面に叩きつける」

女2・3・4 「カツエンムジーク、嫌がらせ。猫の音楽、嫌がらせ」

男1 「宗教革命の記念日には、プロテスタントの坊主共が、猫をカソリックの坊主のように刈り上げ、僧衣をまとわせて、絞首台に吊るす」

男3 「カツエンムジーク、嫌がらせ。猫の音楽、嫌がらせ」

男1 「その猫を食べるとあの売国奴たちは言ったんだ」

女2 「夜、猫にすれ違うと、悪魔に出くわす」

女3 「白猫は黒猫同様に、夜昼問わず、危険な存在」

女4 「猫は夜に集会する」

男3 「猫の魔力から身を守る方法はただひとつ」

女2 「猫の尻尾と耳を切り取り」

女3 「脚を一本、叩き潰し」

女4 「毛を引き抜けば猫の魔力は」

男1 「そう、失われる」

女2 「その猫を食べると」

女3 「あの売国奴たちは言ったのよ」

女4 「猫はパン粉がふくらむのを妨害するし」

男3 「漁師が猫にすれ違うと、その日は不漁だし」

女2 「猫を生埋めにすれば、畑に草が生えなくなる」

男1 「そう、その猫を食べると、あの売国奴たちは言ったんだ」

女3 「転んで怪我をしたら、切ったばかりの猫の尻尾から、血をすすれば癒る」

女4 「肺炎の治療には、猫の耳から取った血を赤葡萄酒に混ぜて飲む」

男3 「猫の排泄物を葡萄酒に混ぜ合わせれば、腹痛（はらいた）の薬」

女2 「殺したばかりの猫の脳味噌を、まだ暖かいうちに食べれば、自分の姿を消すことができろ」

男1 「そう、その猫を食べると、あの売国奴たちは言ったんだ」

女3 「女主人が死んだら、飼い猫の首に黒いリボンを結びつけなければならぬし」

女4 「猫が病気の御主人様の、ベッドに飛び上がるのを止めると、御主人様は死ぬし」

男3 「猫は赤ん坊を窒息させるし」

女2 「猫は噂話を聞いて、外にひるげるし」

女3 「新築の家を守るには猫を生きたまま壁に閉じ込めなくちゃならない」

男1 「そう、その猫を、あの売国奴たちは食べると言ったんだ」

女4 「男をつかまえないと思っっている女は、猫の尻尾を踏まないようにしなくちゃならないし」

男3 「方が一、踏んじまったら、一年間、結婚を延した方がいいし」
女2 「猫を食べれば妊娠するし」
女3 「猫を埋めれば、病気の林檎の木に実をつけさせることができる」
男1 「そう、その猫を、あの売国奴たちは食べると言ったんだ」

沈黙があり、やがて、

男1 「どうするね？」

女2 「えっ？」

男1 「どうすればいいかね？」

女3 「えっ？」

男1 「どうしたいかね？」

女4 「えっ？」

男1 「どうすればいいと思うかね？」

男3 「えっ？」

また沈黙があり、やがて、

男1 「私はね……」

女2 「ええ」

男1 「あの売国奴たちは……」

女3 「ええ」

男1 「やはり」

女4 「ええ」

男 1

「役に立って貰うのがいい、と、思うんだ」

男 3

「ええ」

男 1

「そう、私たちの役に立って貰うのがいい、と、思うんだよ」

街の人々は男1の言葉に頷き合う。

一千九百三十五年三月十六日、ヒトラー帝国では、義務兵役制が復活し、大参謀本部と士官学校が再建された。一千九百三十六年、兵役期間は二年に延長された。一千九百三十八年、ヒトラーは国防軍のフォン・フリッツユ将軍以下、五十人の高級将校を追放し、司令部を改造した。かくして、軍はナチズムに縛り上げられてしまった。

小部屋では、男2と女1が衰弱している。

男1はく基本的書物>という名の店を出て、小部屋に向かう。

男1 「どうかね？役に立ってはみないかね？」

女1 「なにが必要なの？」

男1 「君たち、さ、勿論」

男2 「俺たちのなにが必要なんだ？」

男1 「君たち、丸ごと、さ、勿論」

女1 「体と頭と、それから心？」

男1 「体と頭と心、さ、勿論」

男1は小部屋に着き、不作法に上がり込む。

男1 「あんたは、見ることができるんだ」

男2 「なにを？」

男1 「渦を巻いている彼女の小腸」

男2

「見たくない」

男1

「彼女の小腸がリズムカルに波打っているのを」

男2

「見たくない」

男1

「子宮はなめらかで艶のある、オレンジ大の灰色のドームを」

男2

「見たくない」

「子宮の横からは、直径が鉛筆大の卵管が伸び、金色と茶色の混ざり合った靱帯で子宮と結口しているのを」

男2

「見たくない」

男1

「形も大きさもアーモンド位の卵巣を」

男2

「見たくない」

男1

「茶色を帯びた赤い表面が光を反射して鈍く光るのを」

男2

「見たくない」

男1

「そうしてあなたは、ピーカーに五億の精子を放出し」

女1

「見たくない」

男1

「医者は小さな注射器でそれを吸い上げ、ペトリ皿に置く」

女1

「見たくない」

「顕微鏡の中の世界では、精子の群れが、何万という丸まったオタマジャクシのように男性的なエネルギーにあふれ、あちらへ、また、こちらへと突進し、勇敢だが目的のない混乱状態にある」

女1

「見たくない」

男1

「彼等は卵形の卵子の五十分の一の大きさをしている」

女1

「見たくない」

男1

「君たちは見ることが出来る」

男2

「見たくない」

男1 「精子が卵子の外側の粘膜を正確に通過し、細胞壁にぶつかり、頭を突っ込むのを」

女1 「見たくない」

男1 「その勝利に元気づけられ、たちまち尻尾が振られるのを」

男2 「見たくない」

男1 「その動きは、穴を進む蛇に似てるのを」

女1 「見たくない」

男1 「それが起きると同時に、卵子が変化するのを」

男2 「見たくない」

男1 「外側の粘膜が外へ外へと膨張し、見た目にも厚くなり、ほかの精子がまったく通過できないうようになるのを」

女1 「見たくない」

男1 「競争に破れた精子は粘膜の表面にむなしくぶつかり、跳ね返され、くねくねした動きをとめて、死んでゆくのを」

男2 「見たくない」

男1 「そうして卵子は受精し、プラスミド・チルドレンは生まれてくる。新しい人間」

女1 「見たくない」

男1 「見たくないかね？」

男2 「ああ、見たくない」

女1 「知識は時に危険よ、見たくないわ」

男2 「知識は時に危険だ、持ちたくない」

男1 「馬鹿なことを。人間が新しい発見を目の前にして躊躇ったのは、アダムが林檎に近づいた時だけだよ」

女1 「保護してくれる無知に包まれていたいわ」

男1 「禁じられた知識などというものはこの世にはないよ」

女1 「一体……」

男1 「えっ？」

女1 「どの位、突然変異を繰り返せば、人間は人間でなくなるの？」

男1 「実にいい質問だ、勿論答えられないがね」

女1 「私たちが見たいのは」

男2 「午後も遅くなつて」

女1 「淡い黄色の陽ざしが」

男2 「斜の筋になって、窓から差し込み」

女1 「意味もなく混乱して漂っている空気中の」

男2 「塵を照しだす光景だ」

男1 「混乱は顕微鏡の中にだけ、ある。それ以外の混乱はただの無知だ」

女1 「出て行って」

男1 「君たち未来のアダムとイヴ……」

男2 「受精が欲しければ、セックスする。出て行ってくれ」

男1 「君たち、現代の英雄」

女1 「英雄はいらないわ、欲しいのは栄養よ、出て行って」

男1 「英雄は栄養から生まれてくるんだ」

男2 「栄養から生まれてくるのは豚だ。そうして俺たちは豚を飼いたくはないが、豚肉は欲

しいんだ。出て行ってくれ」

男1 「飢えて死にたいんだね」

女1、不意に男2にしがみつくと、

女1 「駄目です、これ以上、口を嚙んではいられません。あなたは私を魂の拷問にかけました。

魂はうち拉がれてしまい、あなたの傍で思いの丈をうちあけたがつています。でも、あなたが考えさせてくれた事柄の数々を、ほんの少しだけ、お伝えしようとしても、きりなくお話ししなければなりません。そうしてたとえ、あなたの才能が身についたにせよ、あなたから感じさせられたことを、すべて表現するのは、到底、無理なことでしょう。あなたの魂はどここの国の住人なのですか。午後の陽ざしが斜の筋になって窓から入り込み、意味もなく混乱して漂っている空気中の塵の光景、その中にある光の子供たち、これはみな、あなたの魂が生んだ子供なのですね。精神という名の顕微鏡では、あんな風な子供は生めません。ですから私に魂を生む体をください。魂だけでもあれだけ甘い涙を流してしまった子供たちの、今度は生きた姿をあなたの体の中に見届けたいのです」

告げる。

男2は女1を抱きしめる。

男2「

体のまわりに非現実の霧が濃くたちこめて、口をきく気力もない時、俺は堂々とした怠惰の中で、お前を抱きしめる。窓から見えるものと言えば、水たまりと夕闇と、死を思わせる奇妙な赤い輝きだけ。闇が木々の下から這いだして、黒い霧のように空気中に染みわたってゆく。黄色い信号が沈む夕陽を受けて、道端の水たまりに影を映しているいる所。そんな所で、俺は体を抱く。お前という名のついた体、お前の髪、お前の顔、お前の乳房、お前の腹、お前の脚、お前の腕、お前のお前。そして俺は演説する。紳士淑女の皆さん、この場をお借りして一言のべさせていただく。ほんの一言だけだ。いいか、あんなたち、あんなたちはケツの穴だ。俺たちは、監視人になりたいなどというガキが生まれたら、通りへ放り出して、フェラチオ専門の淫売にしてやるつもりだ。憲法第一条を廃棄して、あんなたちを強制収容所へ放り込むことができたらドイツはいい国にな

る筈だ。紳士及び淑女のみなさん。あんたたちは糞だ。頭が糞だ。体はもつと糞で、心はもつともつと糞だ。とつとどうせやがれ」

女1と男2は笑いあいながら、裸身となってゆく。

男1

「みみずのたわごとだ。御粗末なメロドラマだ」

男2

「そうさ、かたや、パートタイムの娼婦。かたや、フルタイムのろくでなし。だが、少なくとも嘘はつかなかった。パートタイムの娼婦とフルタイムのろくでなしの間には、ある種の愛があった。不思議な愛があった。そしてなにより友情があった。それが踏みにじられた。国家的嘘によって」

女1

「そう、かたやパートタイムの娼婦。かたや、フルタイムのろくでなし。だけど、少なくとも嘘はつかなかった。パートタイムの娼婦とフルタイムのろくでなしの間には、ある種の愛があった。不思議な愛があった。そしてなにより友情があった。それが踏みにじられた国家的嘘によって」

男2

「俺たちは一マルクを盗み」

女1

「盗んだ一マルクでつながった」

男2

「そうしてその一マルクは膨らみ」

女1

「国家機密に成長した」

男2

「俺たちは機密を盗んだ男と女」

女1

「そうしてその国家機密は膨らみ」

男2

「売国奴に成長した」

女1

「私たちは売国奴になり」

男2

「今がきた」

女1

「そうね、今だわ」

男2 「一千九百三十九年のドイツの今だ」

女1と男2は腕を組んで立上がり、小部屋を出て行く。
裸身で堂々と出て行く。
その姿にく第二次世界大戦勃発のニュースが流れる。
街の人々はそれを見守っている。

男1 「売国奴がね」

言って歩きだす。

女2 「ええ、聞いたわ」

女3 「処刑されたそうだわ」

女4 「ええ、聞いたわ」

それから、街の人々は口々に言いはじめる。

おはよう

おはよう

おはよう

おはよう

おはよう

街をきれいにしましょう
体をきれいにしましょう

血をきれいにしましょう

おはよう

おはよう

おはよう

おはよう

おはよう

私たちの街をきれいにしましょう

私たちの体をきれいにしましょう

私たちの血をきれいにしましょう

おはよう

おはよう

おはよう

おはよう

私たちの街はきれいです

私たちの体はきれいです

私たちの血はきれいです

おはよう

おはよう

おはよう

おはよう

おはよう

おはよう

あなたの体はきれいですか？

あなたの血はきれいですか？

そうして街の人々は、聞きながら去ってゆく。

